

# 東洋學報

第參拾八卷第壹號

昭和三十年六月

## 論說

### 兀惹考

和田清

一

兀惹といふ部族の名前は遼史に初めて現はれる。遼史の本紀によれば、景宗の保寧七年(985)の條に、

秋七月、黃龍府衛將燕頗殺都監張琚以叛。遣敝史耶律曷里必討之、九月敗燕頗於治河。遣其弟安搏追之。燕頗走保兀惹城。安搏乃還。以餘黨千餘戶城通州。

と見え、聖宗本紀及び屬國表によれば、聖宗の統和十年(998)十一月「兀惹來貢」とあるのを始めとして、屢々兀惹の名が見える。統和十三、四年(991-6)の交には、兀惹の酋長烏昭度が前記の渤海の燕頗と鐵驪を侵したといふので、遼は奚王和朔奴及び東京の留守蕭恆德等を遣はして之を討伐したと云ひ、その後兀惹は屈服して頻りに入貢した。なほ遼史<sup>卷三</sup>兵衛志<sup>下</sup>屬國軍の條にも「兀惹」の名が見え、百官志<sup>卷四</sup>北面屬國官の諸部の條には「兀惹部亦曰烏惹部」とも見えてゐる。

この兀惹はなほ烏舍・屋惹・溫熱等の字面を以つて宋史・松漠紀聞・契丹國志等に現はれ、金史には兀的改もしくは烏底改として知られ、元史には吾者、明代の史乘には兀者・兀狄哈として現はれてゐる。思ふに Tungus 語にては森を Wei といひ、人を Kai といふといふ。兀惹・吾者は Wei の轉訛で、兀的改・兀狄哈は Wei-kai の音譯であらう。さうしてこれは恐らく清代の東海窩集 (Wei) 部と同じく、今日の Udehe も或はその遺名であらう。或はかくの如く廣く久しくて行はれたところから、古の三國時代の沃沮をもこれではないかといふ説もあるが、それは時代が餘りにかけ離れてゐるし、場所も少しく違ふやうであるから、俄に信ぜられない。

## 二

さてこの兀惹が如何なる民族に屬し、何處に住んでゐたかについては定説がない。池内宏博士は遼史卷八 和朝奴傳にその兀惹征伐を記して、

統和十三年秋、遷都部署、伐兀惹。駐于鐵驪、秣馬數月、進至兀惹城。利其俘掠、請降不許、令急攻之。城中大恐、皆殊死戰。和朝奴知不能克、從副部署蕭恆德議、掠地東南、循高麗北界而還。以地遠糧絕、士馬死傷。詔降封爵。

とあり、卷八 同書蕭恆德傳にも、同卷九 耶律幹臘傳にもほど同様に記したるを以つて、先づ兀惹城が鐵驪の住地と高麗

の北界との中間にありしことを推定せられた。さうして博士は鐵驪の住地を今の哈爾濱の東南の阿城 (阿勒楚喀 Alchuka) 方面に比定せられたから、ここから高麗の北界に至る地で、俘掠の利益があり、且つ難攻不落の城は故の渤海の上京龍泉府の外は他に求むべくもないからとて、兀惹城は即ち龍泉府の故地であらうとされた。渤海の上京龍泉府の土名は忽汗城であるやうであるから、それがまた兀惹城と呼ばれたのは不思議のやうであるが、それはさうではない。渤海の涇沱湖が唐人か

ら忽汗海と呼ばれたやうに、忽汗城は唐人の名づけた名であつて、土名は實は唯一の兀惹城なのである、とかういふ風に説明された<sup>1)</sup>。即ち博士は渤海の亡後には忽ちその故城に兀惹部が據つて起り、一時勢盛んであつたが、後に生女直が鐵驪（阿城）の地に崛起するに及び、兀惹は衰へて鐵驪がその地に代つたとするのである。

遼代社會史の大著を著はした Karl Wittfogel 氏及び馮家昇氏もその説に従ひ、殊に池内博士の門弟なる日野開三郎氏はその説を奉じて「兀惹部の發展」なる大論文を草し、所説を敷衍してこの時代に於ける滿洲民族の活躍を殆ど悉く兀惹部の發展に歸せられた。但し渤海の餘類が當時になほ殘存してゐたことは認めざるを得ないから、日野氏は渤海を名目上の主權者とし、兀惹を實際勢力の把握者と見て、兩者の關係は恰も徳川時代に於ける朝廷と幕府との如きものと考定せられたのである。しかしこれが果して可能なことであらうか。

### 三

私が第一に疑問を抱いたのは、兀惹は東北極邊の部族とせられてゐて、決して渤海の故土の如き近地と考へられなかつたことである。例へば近頃發見された遼の聖宗の哀冊文によると、遼の最盛時の極邊を説いて、左の如く見える。

東振兵威、辰下以之納款。西被聲教、瓜沙綏是貢珍。夏國之羌渾速職。遼荒之烏舍來貢。

辰下は辰韓并韓であつて、ここには高麗の屈服したことを意味し、瓜沙二州は安西・敦煌の邊で、ここには畏兀兒の朝貢を示し、夏國の羌渾は羌・吐谷渾の畧であつて、即ち西夏の來服を示す。だからそれと並べ稱された遼荒の烏舍も極邊でなければならぬ。烏舍は即ち兀惹である。渤海の都も遼の本土からは可成りに遠いけれども、これは遼の收服した内部である。これを以つて極東と誇稱したものとは思はれない。

遼史<sup>卷一</sup> 聖宗本紀によると、統和十五年(985)三月庚寅の條に、

兀惹烏昭度以地遠、乞歲時免進鷹馬貂皮。詔以生辰正旦、貢如舊、餘免。

とある。渤海の都では「以地遠、乞歲時免進」といふのも變であるし、鷹馬貂皮は黒龍江邊の產物であつて、渤海の名産ではないから、旁々兀惹が渤海の故土に據つたものとは認め難い。

更に金史<sup>卷二</sup> 地理志上によると、左の如く云ふ。

金之壤地封疆、東極吉里迷・兀的改諸野人之境。北自蒲與路之北三千餘里火魯火曠謀克地爲邊。……

蒲與路は金の上京會寧府の北六百七十里にあつて、今の齊々哈爾の東の瑚裕爾(Huyur)河の流域である、これより北三千餘里の火魯火曠謀克の地は今の雅克薩(Albazin)あたりの方面でもあらう。これと對比して擧げられた吉里迷・兀的改諸野人の地方も相當遠隔の地方でなければならぬ。吉里迷の名はこの時始めて歴史に現はれるが、即ち後の吉列迷・乞列迷で、黒龍江最下流域の土人 Gilyak 即ち Gillemi の音譯である、とすれば、これと並んだ兀的改はやはりその方面の土人としなければならぬ。兀的改は即ち兀惹である。

翻つて契丹國志<sup>卷二</sup> 四至鄰國地里の條を見ると、

東北至生女直國、……又東北至屋惹國・阿里眉國・破骨魯國等國、每國各一萬餘戶。西南至生女真國界、……

とも見える。阿里眉・破骨魯は所謂五國部の一で、阿里眉は奥里米にも作り、破骨魯は剖阿里にも作る、俱に松花江下流域の國々である。然らば屋惹國はこれらの國々の隣で、今の阿城にゐた生女真よりも遙に東北にゐたのである。屋惹は即ち兀惹である。

さう言へば、元末に吾者野人が叛いたので、元は之を鎮壓して吾者野人・乞列迷等處諸軍萬戶府を置いたと言ふことがあ

る。元史（卷四）順帝本紀、至正十五年（1355）八月の條によると、

立吾者野人・乞列迷等處諸軍萬戶府于哈兒分之地。

とあるものが即ち是れある。こゝでも吾者野人と乞列迷とは一所に出て来る。哈兒分の地は今の黒龍江の中流、Dondon河の注ぐ附近であるから。<sup>(7)</sup>吾者野人はやはりこの方面にゐたのである。吾者野人は即ち兀惹野人なのである。

なほ清の吳振臣の寧古塔紀略には左の如く、

衣朗哈喇、今設土城、有官守、與金時五國城相近、略存其形而已。又東北五六百里爲呼兒喀。又六百里爲黑斤。又六百里爲非牙哈。總名烏稽、又名魚皮、因其衣魚皮、食魚肉爲生、故名。

とある。衣朗哈喇は Ilan-hala で、即ち今の依蘭（三姓）である。その東北五六百里の呼兒喀は Hurka で、即ち忽汗河の名を負ひ、その東北六百里の黑斤は Hejen で、赫哲即ち Gold の別名であり、また六百里の非牙哈は Fiyaka で、即ち Gilyak の別名である。<sup>(8)</sup>これを總じて烏稽といひ、また魚皮といったといふ。

この寧古塔紀略の紀事はやゝ曖昧を免れないが、楊賓の柳邊紀略の紀事はもつと明白であつて、疑問の餘地を残さないやうである。その卷三に曰く、

東北邊部落現在貢寧古塔者八、每年自四月至六月、俱以次入貢。自寧古塔東北行四百餘里、虎爾哈河松花江兩岸者、曰拏耶勒（略）、曰革依克勒（略）、曰訥什喀里（略）、此三喀喇（略）、<sup>喀喇漢言姓也</sup>役屬久、其頭目皆尙公主、少年精悍者漸移家內地、編甲入戶、或有爲侍衛者。初服魚皮、今則服大青衣冠、所謂窩稽達子是也。又名異齊滿洲（略）、<sup>（注）</sup>異齊者漢言新也、其地產貂（略）。<sup>（注）</sup>自寧古塔東行千餘里、住烏蘇里江兩岸者曰穆連（略）、<sup>（注）</sup>俗類窩稽、產貂。又東二百餘里、住伊曠河源者曰欺牙喀喇、其人黥面、其地產貂、無五穀、夏食魚、冬食獸、以其皮爲衣。自寧古塔東北行千五百里、住松花黑龍江兩岸者割

髮黑金、喀喇凡六、俗類窩稽、產貂。以上皆每年入貢。又東北行四五百里、住烏蘇里・松花・黑龍三江匯流左右者曰不剃髮黑金。喀喇十數、披髮、鼻端貫金環、衣魚獸皮、陸行乘舟或行冰上、駕以狗、御者持木篙立舟上、若水行攔頭者然、所謂使大國也(注略)、其語與窩稽異、無文字筆墨、以皮條記事、小大隨之、其地產貂。又東北行七八百里、曰飛牙喀、俗產與不剃髮黑金同、而赤臂無袴、以皮蔽其前。……

といふ。即ち吳振臣は衣朗哈喇から呼兒喀・黑斤・非牙哈までを總じて烏稽と名づけ、また魚皮といったといふのであるが、楊賓は三喀喇(三姓)のみを窩稽即ち烏稽といふのである。しかしこの邊は皆魚皮を衣とし、その「俗類窩稽」のであるから、これを總じて烏稽と見做したのもあつたのであらう。たゞ不剃髮黑金(赫哲)以下は其の語も窩稽と異り、俗產悉く違ふのであるから、之を窩稽とは見做し難い。況して飛牙喀は明かに非牙喀即ち Gilyak であつて、これは窩稽(烏稽)ではない。之を要するに、清代には三姓以下飛牙喀以上の黑龍江下流の土人を烏稽・窩稽などと呼んだのである。前代の兀惹もやはりこの邊にあつたのではあるまいか。

## 四

考へて見るに、唐代、渤海の頃、滿洲の部族の名は悉く現はれて來るが、その中にも兀惹の名は見えない。餘の部族の中でも、殊に強盛であつたのは、渤海靺鞨に亞いでは黑水靺鞨であつた。黑水靺鞨は渤海が靺鞨の諸部を悉く併呑した後に、なほ繁盛を續けてゐた。舊唐書卷一九九下 靺鞨傳にはその事をいつて、

唯黑水部全盛、分爲十六部、部又以南北爲柵。開元十三年、安東都護薛泰請於黑水靺鞨內置黑水軍、續更以最大部落爲黑水府。仍以其首領爲都督、諸部刺史隸屬焉。中國置長史、就其部落監領之。十六年、其都督賜姓李氏名獻誠、授雲麾

將軍、兼黑水經略使。仍以幽州都督爲其押使。自此朝貢不絕。

とあり、新唐書<sup>卷二</sup> 黑水靺鞨傳にもほゞ同様の意味を傳へてゐる。渤海の最強時には流石にそれに壓倒されたが、渤海の衰へると共に、黒水は直に崛起して中國に朝貢して來た。その事は冊府元龜・舊五代史及び五代會要等に詳かである。<sup>(9)</sup>しかしこれは中國内部の史乘に限り、當時の遼史には決して見えてゐない。遼史にも時に黒水の名は見えるけれども、それは恐らく他の河川の名前であつて、部族としての黒水の名は決して出て來ない。さうしてその代りに現はれるのが、從來聞えなかつた兀惹部の名である。

思ふに、黒水といふのは明かに土名 Sahaliyan Ula の譯名であるけれども、それは唐・渤海慣用の雅名であつて、決して部族の土名そのものではない。北方に起つた遼は多く漢名を棄て、土名を用ひたこと、長嶺府を回波部といひ、南海府を蒲盧毛朶部といつた如くであるから、ここにも黒水部の土名の兀惹を採用したのではなからうか。河の名の黒水もこれと共に廢してこれより後は混同江もしくは黒龍江と呼ばれたやうである。<sup>(11)</sup>實は黒水部が即ち兀惹なことは、宋人が既に明言してゐるのである。宋の李燾の續資治通鑑長編<sup>卷七</sup> 太中祥符二年（遼の統和二十七年 1008）五月壬戌の條にその消息を傳へて、

邊臣言、契丹爲黒水所侵而遁、其部下防境上、謂黒水爲惡弱國土。

とあるものが是れである。この事實は遼史では明かにし難いが、惡弱國土とは明かに兀惹國の別譯である。これが即ち黒水だといふ。唐・渤海の黒水靺鞨が即ち兀惹の前身なることは何より確かではないか。渤海の衰へた後、之に代つて勢力を振つたのが黒水靺鞨なのは當然である。

池内博士は鐵利を以つて今阿城附近に擬せられたけれども、それは明かに誤で、鐵利は今の三姓の對岸附近であることは別に論證した通りである。さて話は前に返り、統和十三年（985）遼の兵は兀惹を伐つのに、先づ鐵驪（鐵利）に出で、そこ

で馬に秣ふこと數月、それより兀惹城に向つたといふ。若し兀惹城が渤海の上京龍泉府即ち今の寧古塔西南の東京城の方面なら、遼軍は何を苦しんで今の三姓の方面に出でたらうか。まるで方角が違ふではないか。さうではなく、兀惹城が黑龍江の下流方面にあつたればこそ、遼は鐵驪に出でたのである。

それではこの方面で、虜掠の利があり、且つ難攻不落の名城だつた兀惹城とは果してどこか。私はこれこそ唐が黑水府を置いた、黑水靺鞨最大の部落に外ならず、即ち今の要衝ハハロフスクでなければならぬと思ふ。ハハロフスクが黑水府の置いてあつたところのことは既に論證した。その地が唐以來の富盛を承けて豊裕であり、且つ要害第一だつたことは言ふまでもなからう。たゞこゝだとすると、それより「掠地東南、循高麗北界而還」といふのが、頗る無理なやうである。しかしそれも考へやうで、虜掠を事とした遼の軍は撓力(Noro)河もしくは穆稜(Morin)河を溯つて高麗の北界へ出たとしてもよく、若しくは一旦鐵驪まで退いて、そこから牡丹江を溯つたとしてもよいであらう。いづれにしても、その地が「地遠糧絶、士馬死傷」したことは事實である。

## 五

渤海を滅ぼした遼は後に残つた黑水の兀惹を力を盡して伐つた。前に述べた統和十三年の役も同二十七年の變もその例證だが、遼史に散見する兀惹の紀事は皆これである。その詳細については池内博士等の論證に詳かであるから、今は略す。しかし問題になるのは、朝鮮の記錄に見えた黑水の紀事である。先づ第一に金富軾の三國史記新羅本紀憲康王十二年(888)春の條に見える左の記事である。

北鎮奏、狄國人入鎮、以片木掛樹而歸。遂取以獻。其本書十五字云、「寶露國與黑水國人、共向新羅國和通。」



寶露國は池内博士の研究によると、今の咸鏡南道安邊の西の奉龍附近の部族なるべしといふ。<sup>(15)</sup>これは渤海の末期に黒水が活躍し出した時であるから、さして問題とするに足らないやうに見える。

しかし更に高麗史<sup>卷九</sup> 尹瑄の傳を見ると、

尹瑄鹽州人、爲人沈勇、善韜鈴。初以弓裔誅殺無厭、慮禍及己、遂率其黨、走北邊、聚衆至二千餘人、居鶻巖城、召<sup>○</sup>黑<sup>○</sup>水<sup>○</sup>蕃<sup>○</sup>衆、久爲邊郡害、及太祖卽位、率衆來附、北邊以安。

とある。尹瑄の來歸は高麗の太祖元年(313)八月のことで、鶻巖城はこれも池内博士の研究によると、今日の京元線高山驛の西の新岱里山城であるといふ。<sup>(16)</sup>これで見ると、當時黒水蕃衆はこの邊まで延びてゐたのである。果して太祖世家によると、

四年春二月甲子、黒水酋長高子羅率百七十人來投。……夏四月乙酉、黒水阿於聞率二百人來投。

など見え、殊に同十九年(330)秋九月に太祖が後百濟の神劍を撃破した戦には、「黒水・達姑・鐵勒(鐵利)諸蕃勁騎九千五百」が軍に加はつたといふ。津田左右吉博士や池内宏博士はこの懸絶せる北狄の名を不合理として、これを他部族の假稱に過ぎずとされたが、小川裕人氏や三上次男氏はこれを實際移住してゐたものと考へられた。これは勿論これらの部族が咸鏡道邊に來てゐたものと考へるべきであらう。

高麗史にはなほ顯宗世家に、鐵利や他の女眞諸部落と共に、左の如く黒水靺鞨の入貢のことが頻見する。

八年(1017)八月甲午、黒水靺鞨阿離弗等六人來投、分處江南州縣。

十年(1019)十二月庚寅、東黒水國酋長仇突羅來獻土馬兵仗。

十一年(1020)春正月丙寅、黒水靺鞨闕戸頃・高之間等二十四人來獻土物。

同年五月乙亥、黒水靺鞨烏頭那等七十餘人來獻方物。

十二年(1082)春正月、是月黑水靺鞨酋長阿頭陀弗等獻馬及弓矢。

同年秋七月癸巳、東女眞黑水酋長居蔚摩頭蓋來。

同年九月乙未、黑水靺鞨蘇勿蓋・高之間來獻方物。

十三年(1083)春正月丁亥、黑水酋長沙逸羅・曼投弗等來朝。

同年五月癸巳、黑水靺鞨疎意等三十餘人來朝。

同年八月甲寅、鐵利國首領那沙遣黑水阿夫間來獻方物。

十四年(1083)春正月、是月黑水靺鞨烏沙弗等八十人來獻馬及方物、各賜布帛。

十五年(1083)夏四月壬午、黑水靺鞨古刀買等來獻土物。

同年九月甲寅、黑水靺鞨阿里古來。

十八年(1087)二月甲午、黑水靺鞨歸德大將軍阿骨・阿駕來獻土馬器仗。

但しその中、十二年九月の「黑水靺鞨蘇勿蓋」は二十一年五月の「東女眞奉國大將軍蘇勿蓋」に、十三年正月の黑水酋長沙逸羅」は十九年十二月の「東女眞沙逸羅」に、十八年二月の「黑水靺鞨歸德大將軍阿骨」は十九年三月の「東女眞歸德將軍阿骨」に、それ／＼相當するものと思はれるから、この他にも黑水の酋長で單に東女眞の酋長とせられてゐるものも多々あるであらう。また十三年八月の阿夫間の如く鐵利の酋長に派遣されたものがあるから、遠く黑龍江の本土から來たものもあるであらう。しかし少くともその大部分が咸鏡道方面から來たものなることは推測に餘る。當時は斯くの如き多數の黑水部人が咸鏡道地區にゐたのである。

この地方の土人は通常「三十徒」もしくは「三十姓部落」と呼ばれたのであるが、文宗世家二十七年(1073)五月の條に

は、

東蕃黑水人、其種三十、號曰三十徒。

とも見える。その三十姓のことは顯宗世家三年（1032）春二月の條に詳しく見え、その三十姓を悉く列舉して居り、同じく閏十月の條には「女眞毛逸羅・鉏乙豆軍部落三十姓、詣和州乞盟、許之」とも見えてゐる。

翻つて遼史を見るに、遼にはこの地方の部族と覺しきものに蒲盧毛朶部があり、或は蒲盧毛朶部大王府と名づけられ、統和十四年（986）或は統和十七年（999-1000）の交に、もしくは重熙十三年（1044）の頃に頻りに撻伐を加へられたことを以つて知られてゐる。池内博士はこれこそ高麗の三十姓部落に外ならず、遼が例によつて新たな土名を以つて呼びたるものと考へられた。<sup>(註)</sup>恐らくそれは誤らざる斷案であらう。然るに遼史<sup>卷一</sup>聖宗本紀を見ると、太平六年（1026）夏四月戊申の條に、

蒲盧毛朶部多兀惹戸、詔索之。

と見える。時は正しく高麗の顯宗の時代に當る。高麗には兀惹の名がなく、遼には黒水の稱がないから、こゝには「蒲盧毛朶部多兀惹戸」とあるけれども、これは即ち三十姓部落に黒水靺鞨が多いから、遼は宗主權を主張して之を索めたといふことなのであらう。果してさうなら、兀惹が即ち黒水なることは益々明かではないか。しかしこの黒水部人もやがて年久しくして女眞人の中に同化されてしまつたのである。

## 六

兀惹はかくして渤海の潰滅に乘じ、頗るその故土にも發展した。しかし一方大遼の威力に壓せられては、已むなくその部

長は降り、部衆は他に徙置せられた。遼史<sup>卷一</sup> 聖宗本紀に、

統和十四年冬十月戊午、烏昭度乞内附。

とあり、

統和十五年春正月癸未、兀惹長武周來降。

とあり、更に同書<sup>卷一</sup> 統和二十二年(1004) 九月丙午の條には、

女直遣使獻所獲烏昭度妻子。

とあるものが是れである。兀惹の部衆を移すについては、鄰部鐵驪(鐵利)の勢力が最も能く利用せられたやうである。聖宗本紀開泰元年(1012) 八月丙申の條には、

鐵利那沙等送兀惹百餘戶至賓州、賜綵絹。是日、那沙乞賜佛像・儒書、詔賜護國仁王佛像一、易・詩・書・春秋・禮記各一部。

と見え、太平二年(1022) 五月庚辰の條には、

鐵驪遣使獻兀惹十六戶。

とも見える。鐵利的那沙は嘗て黒水の阿夫間を遣はして高麗に貢獻したもので、高麗史には鐵利國主として見え、高麗に曆日を乞うたこともある。

但し兀惹の戸を賓州へ移したのはこれより前既に先例があり、遼史<sup>卷三</sup> 地理志東京道の條には早く統和十七年(999)の事として左の如く見える。

賓州懷化軍節度、本渤海城。統和十七年遷兀惹戶、置刺史于鴨子・混同二水之間。後升兵事、隸黃龍府都部署事。……

さうしてその誤ないのは次の宋人の記事によつて證明せられる。賓州は今の北流松花江に伊通河の注ぐ點、遜札堡（五家店）の對岸八里營子の附近なるべしといふ。

池内博士は續資治通鑑長編<sup>卷五</sup> 眞宗の咸平六年（遼の統和二十一年 1008）七月の條に引いた契丹供奉官李信の言に、

其國境、自幽州東行五百五十里、至平州。又五百五十里、至遼陽城、即號東京者也。又東北六百里至烏惹國、其國用漢文法、使印八角而圓之。

とある、遼陽城の東北六百里の烏惹國を以つて、即ち上京龍泉府の兀惹國とせられたが、上京龍泉府は營州（朝陽）の東二千里にあり、さやうな近い所ではない。この烏惹國こそ外ならぬ賓州の兀惹國なのである。即ち統和二十一年には既に賓州に兀惹國があつたのである。

この賓州の兀惹國は金代にもなほ榮えてゐたものと見え、有名な許亢宗行程錄<sup>22</sup>には烏舍寨と見え、洪皓の松漠紀聞<sup>23</sup>には溫熱國とあり、

溫熱者國最小、不知其始所居、後爲契丹徙置黃龍府南百餘里<sup>24</sup>、曰賓州。州近混同江、即古之粟末河黑水也。部落雜處、以其族類之長爲千戶統之。

といひ、契丹國志<sup>卷二</sup> 六二にも同様に見えてゐる。遼朝經營の結果はさしもの兀惹も本國が衰へ、その徙置者の本據も解らなくなつてゐた。さうして後にはその賓州の溫熱國そのものがまた解らなくなつて了つたのである。

## 七

金代も初めは積極的であつたから、兀惹即ち烏底改の經營をも行つた。金史<sup>卷七</sup> 三 晏傳によれば、阿离合懶の子晏が明敏

で謀略の多かつたことを述べ、

天會初、烏底改叛。太宗幸北京、以晏有籌策、召問稱旨。乃命督扈從諸軍、往討之。至混同江、諭將士曰、今叛衆依山谷、地勢險阻、林木深密、吾騎卒不得成列、未可以歲月破也。乃具舟楫、令諸軍據高山、連木爲柵、多張旗幟、示以持久計、聲言俟大軍畢集而發。乃潛以舟師浮江而下、直擣其營。遂大破之、據險之衆不戰而潰、月餘一境皆定。……とある。金の北京は熱河の大名城の地である。ここに幸した太宗が扈從の諸軍を發して往きて討たしめたのであつて、混同江は今の松花江に續く黒龍江であらう。その深險の處に至つて、舟楫を櫂して之を破つたといふ。その烏底改は即ち金の東境の極まるところの兀的改であらう。その「林木深密」といふもの、烏底改 (Wei-kai) の名にふさはしいではないか。

しかも金も後代に及んでは頗る退嬰的になつた。同時に烏底改も相當文化的に退化したやうである。世宗本紀大定二十六年 (1186) 九月丙寅の條によると、世宗が君臣應對の語を載せて曰く、

上謂宰臣曰、烏底改叛亡、已遣人討之、可益以甲士、毀其船楫。參知政事馬惠廸曰、得其人不可用、有其地不可居、恐不足勞聖慮。上曰、朕亦知此類無用、所以毀其船楫、欲不使再窺邊境耳。

とあり、その月戊戌には從軍して功の無かつた諸將を罰したことを傳へて、「寧昌軍節度使崇肅、行軍都統忠道以討烏底改、不得克敵而還、崇肅杖七十、削官一階、忠道杖八十、削官三階」とあり、越えて二十八年 (1188) 八月庚辰の條にはまた、上謂宰臣曰、近聞烏底改有不順服之意、若遣使責問、彼或抵捍不遜、則邊境生事、有不可已者、朕嘗思之、招徠遠人、於國家、殊無所益、來則聽之、不來則勿強其來、此前世羈縻之長策也。

とある。其船楫を操つところを見れば、黒龍江畔にゐたことは確かであるが、已に化外の蠻民として擯斥せられてゐたのである。金朝の消極主義を知ると共に彼等の退化を察すべきである。

兀狄哈または兀的改の名はまた明・朝鮮の記載に頻見する。李朝の太祖龍興の事蹟を謳つた龍飛御天歌 第七章 にはその事を記して、「東北一道、本肇基之地也、畏威懷德久矣。野人酋長、遠至移蘭豆漫、皆來服事、常佩弓劍、入衛潛邸、昵侍左右、東征西伐、靡不從焉」といひ、その來服の酋長の名を數へ上げた中に、

嫌眞兀狄哈則古州括兒牙乞木那・答比那・可兒答哥、南突兀狄哈則速平江南突阿刺哈伯顔。闊兒看兀狄哈則眼春括兒牙  
 禿成改等是也。

とあるものがその一例である。この外高麗史の末 卷四六恭讓王 世家四年三月 にも兀的改と見え、大明實錄・李朝實錄等には兀的哈・弓

知介の語が殆ど無數に見える。御天歌の原注に「嫌眞兀狄哈部種名也。古州地名、在速平江之傍、自會寧府北行二日、至阿赤郎貴、又行一日至常家下、又行四日至古州、西距先春嶺四日程也。乞木那爲一人、答比那爲一人、可兒答哥爲一人、三人親兄弟也」とあり、速平江は綏芬河で、古州は今の東京城<sup>24</sup>であり、括兒牙は姓である。實錄には乞木那・答比那・可兒答哥をそれぞれ金文乃・多非乃・葛多介に作る。嫌眞は恐らく赫哲・黑斤(Hejien)で、彼等が赫哲の出身であることを示す。

南突兀狄哈の注には「南突姓也。南突兀狄哈部種名、因人姓以名焉。速平江源出古州界、東流入于海。阿刺哈人名也。其俗稱富人爲伯顔」と見える。南突は清代の記録には那木都魯に作り、例へば滿洲八旗氏族通譜 卷二 那木都魯氏の條等には

「那木都魯、本係地名、因以爲姓、其氏族散處於那木都魯・綏芬・琿春及各地方」と見える。これも綏芬河邊にゐたのである。闊兒看兀狄哈の注には「闊兒看兀狄哈部種名、水居以捕魚爲生者也。眼春地名、在東海南岸、南距慶興一百二十里、西距奚關城一百五十里也、禿成改人名也」とある。奚關城は今の琿春の西の縣城に當るから、こゝから東百五十里、慶興の北百

二十里の眼春の地は殆ど今の Po-sai 灣の北岸である。濶兒看兀狄哈は一に水兀狄哈にいひ、實錄には骨乙看・骨看にも作る。禿成改は實錄の喜樂溫衛の指揮豆稱介である。<sup>(28)</sup>しかし眼春にゐた濶兒看は即ち庫爾喀であつて、一に恰喀拉ともいひ、恐らく Orochi の一種に相違ないと思ふから、<sup>(27)</sup>これは兀狄哈ではなく、別種のものであらう。これをも兀狄哈とすると、古の沃沮と住地も名前も肖て來るが、さうではなく、これは兀狄哈の名が不當に擴がつて、一種の汎稱になつた結果だらうと思ふ。

兀狄哈の名が後に擴大したことは、北方で兀者の名が擴がつて、汎稱になつたことでも類推される。それは兀者諸衛の廣き分布の狀を見ても能くわかる。<sup>(28)</sup>私はそれから推測して、東蒙古の福餘衛のことを「我着」といふのも、或はこの「兀者」の訛ではないかと考へてゐるほどである。清代の東海渥集（窩集・兀哲）部がこの兀者・兀狄哈と關係あるものなることは言ふまでもなからう。

なほ考ふるに、この同じ兀惹部のことを、遼・元・明の如き異種族王朝や清の如き遠く隔つた部族では、兀惹（烏舍）・吾者・兀者もしくは渥集と呼ぶのに對して、金や東北奥地の朝鮮等で、兀的改（烏底改）・兀狄哈と呼ぶのは、明かに別系統の語であつて、Wei（森）に對する Wei-kai（森の人）の對音であらう。これは恐らく前者が他稱の略名なのに對して、後者は自稱の完名であらう。もしさうとすれば、この Tungus 語で呼ばれた自稱はそれ自らの言語であつて、兀惹即ち黒水靺鞨が Tungus 民族なることを確證するものでなければならぬ。なほ兀惹のことを後に赫哲といふのは、この小さき部族名が後に著はれた結果であらう。

以上頗る多岐に互つたが、私の主張したいのは、遼代の兀惹が即ち唐代の黒水靺鞨の後であつて、それが即ち後代の兀的改・吾者・兀者・渥集に外ならず、恐らく今日の黒金・赫哲即ち Gold と同様のものであつたらうといふことだけなので



ある。

昭和三十年三月十日

國際基督教大學研究室に於いて

和田 清

註

- 1 池内宏博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、九〇—一〇三頁)。
- 2 Wittfogel & Feng: *History of Chinese Society*, Liao, p. 97.
- 3 日野開三郎氏「兀菴部の發展」(史淵二九、三〇—三一、三二號)。
- 4 松井等氏「滿洲に於ける金の疆域」(滿洲歴史地理二、一七四頁)、三上次男氏「金の蒲與路について」(東方學報東京一三ノ二)。
- 5 和田清「支那の記載に現はれたる黑龍江下流域の原住民」(東亞史論叢四七二頁)。
- 6 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、一三四頁)。
- 7 和田清「海西東水陸城站について」(滿鮮地理歴史研究報告一五、三一〇頁)。
- 8 和田清「支那の記載に現はれたる黑龍江下流域の原住民」(東亞史論叢四八六—四九九頁)。
- 9 例へば池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、一五五—一五七頁)参照。
- 10 例へば興宗本紀重熙二十年三月壬子の條に「幸黑水」とあり、同二十二年三月丙寅の條に「如黑水濠」とあるが如し。
- 11 自分は皆て黑龍江の名は明代に始まるといつたが、それは明かに誤であつて、遼史に既に頻繁に見える。例へば道宗本紀に大康三年夏四月乙酉「泛舟黑龍江」とあり、大安七年三月丙戌「駐蹕黑龍江」とある如きである。
- 12 和田清「渤海國地理考」(東洋學報三六ノ四、四五六—四五八頁)。
- 13 同上(四五—一四五四頁)。
- 14 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、一一五—一二六頁)。
- 15 同上(一七〇頁)。
- 16 同上(一七一頁)。
- 17 津田左右吉博士「朝鮮歴史地理」(卷一、五九—六二頁)。池内博士「麗初の偽鐵利」(滿鮮史研究中世一、一六八—一七七頁)。
- 18 小川裕人氏「鐵利の住地に就いて」(史林二二ノ二)、三上次男氏「新羅東北境に於ける黑水・鐵勒・達姑等の諸族に就いて」(史學雜誌五〇ノ七)。
- 19 池内博士「蒲盧毛朵部について」(滿鮮史研究中世二、四二四—四三一頁)。
- 20 池内博士「遼代混同江考」(滿鮮史研究中世一、二二四—二二五頁)。

- 21 池内博士「鐵利考」(滿鮮史研究中世一、一〇二頁)。
- 22 許亢宗行程錄は實は鍾邦直の記したものである。今姑く通稱に従ふ。陳樂素氏「三朝北盟會編考」上(歴史語言研究所集刊六ノ二)参照。
- 23 黃龍府は今の農安の方面にあり、賓州は伊通河が松花江に注ぐ邊にあつた筈であるから、「黃龍府南百餘里、曰賓州」は誤解であらう。
- 24 和田清「開元・古州及び毛憐」(北亞細亞學報三)。
- 25 池内博士「鮮初の東北境と女眞との關係」(滿鮮地理歴史研究報告二、二七八―二七九頁)。
- 26 和田清「明初の滿洲經略」(滿鮮地理歴史研究報告一五、一七一―一七四頁)。
- 27 和田清「支那の記載に現はれたる黑龍江下流域の原住民」(東亞史論數四九―四九二頁)。
- 28 和田清「明初の滿洲經略」(滿鮮地理歴史研究報告一五、七七―八四頁)。

(東洋文庫研究部長)